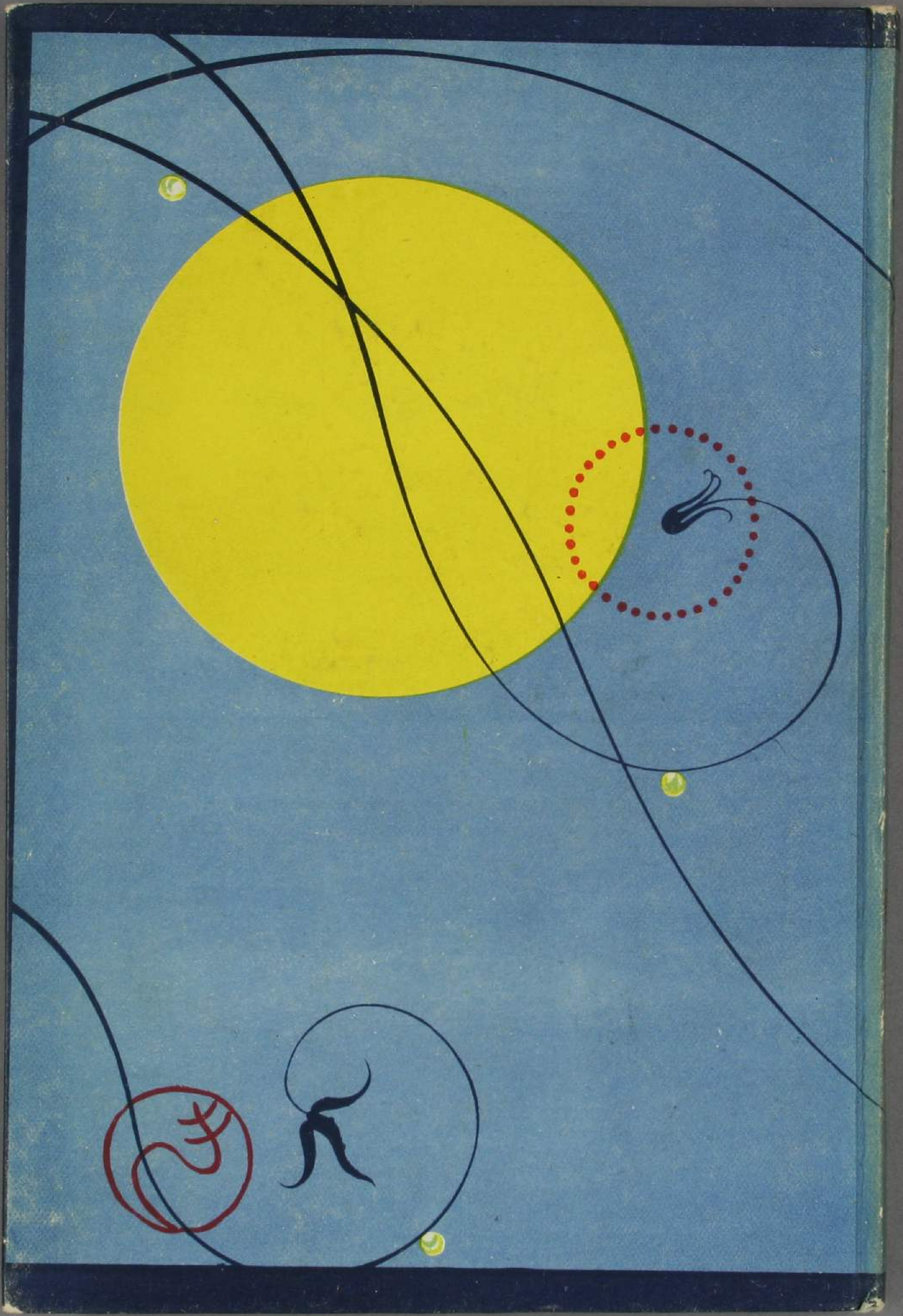
十五夜おつきさん

すゞらんおひめさん



十五夜お月さん

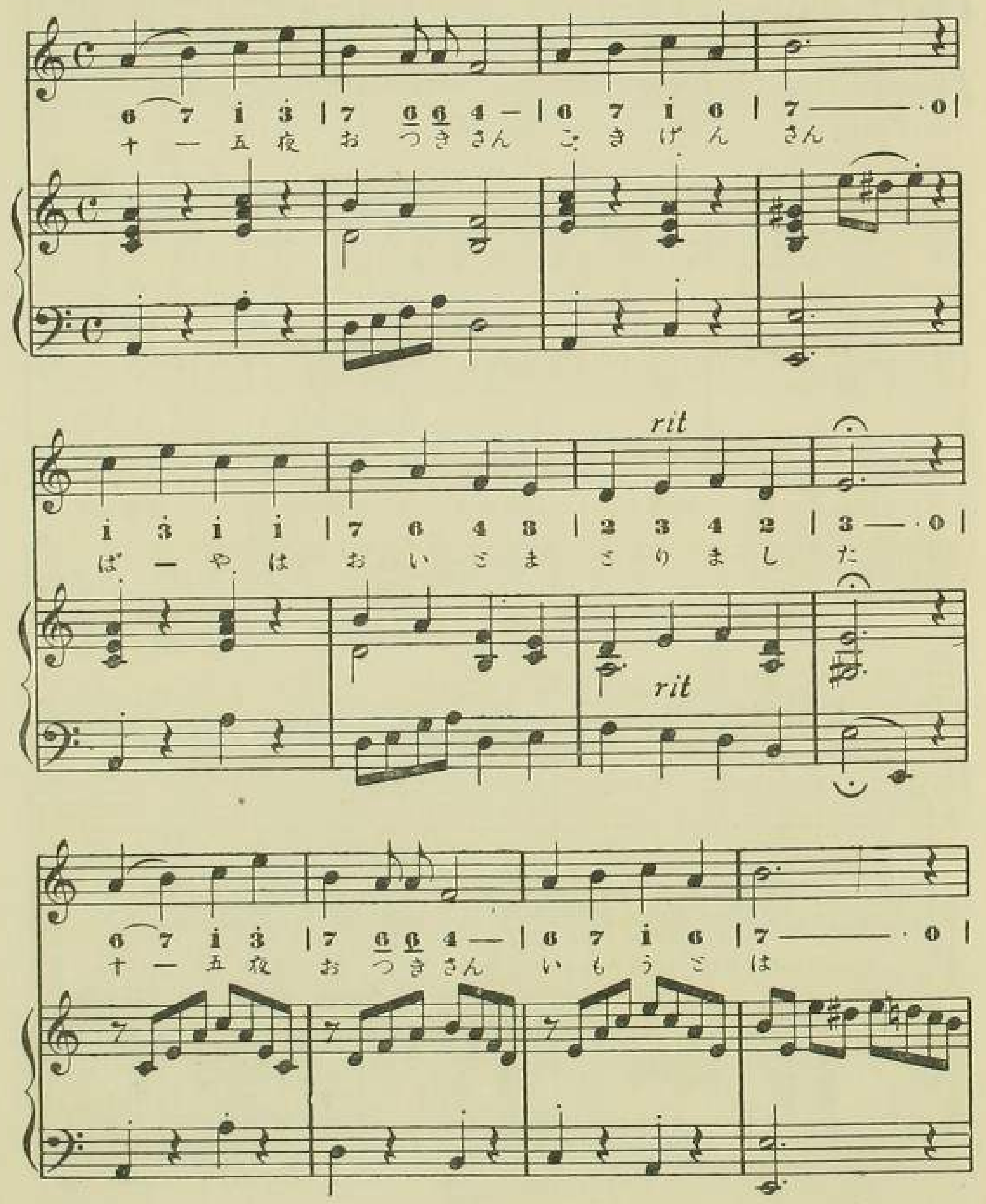
野口雨情著

本居長世 作曲
岡本歸一 裝畫

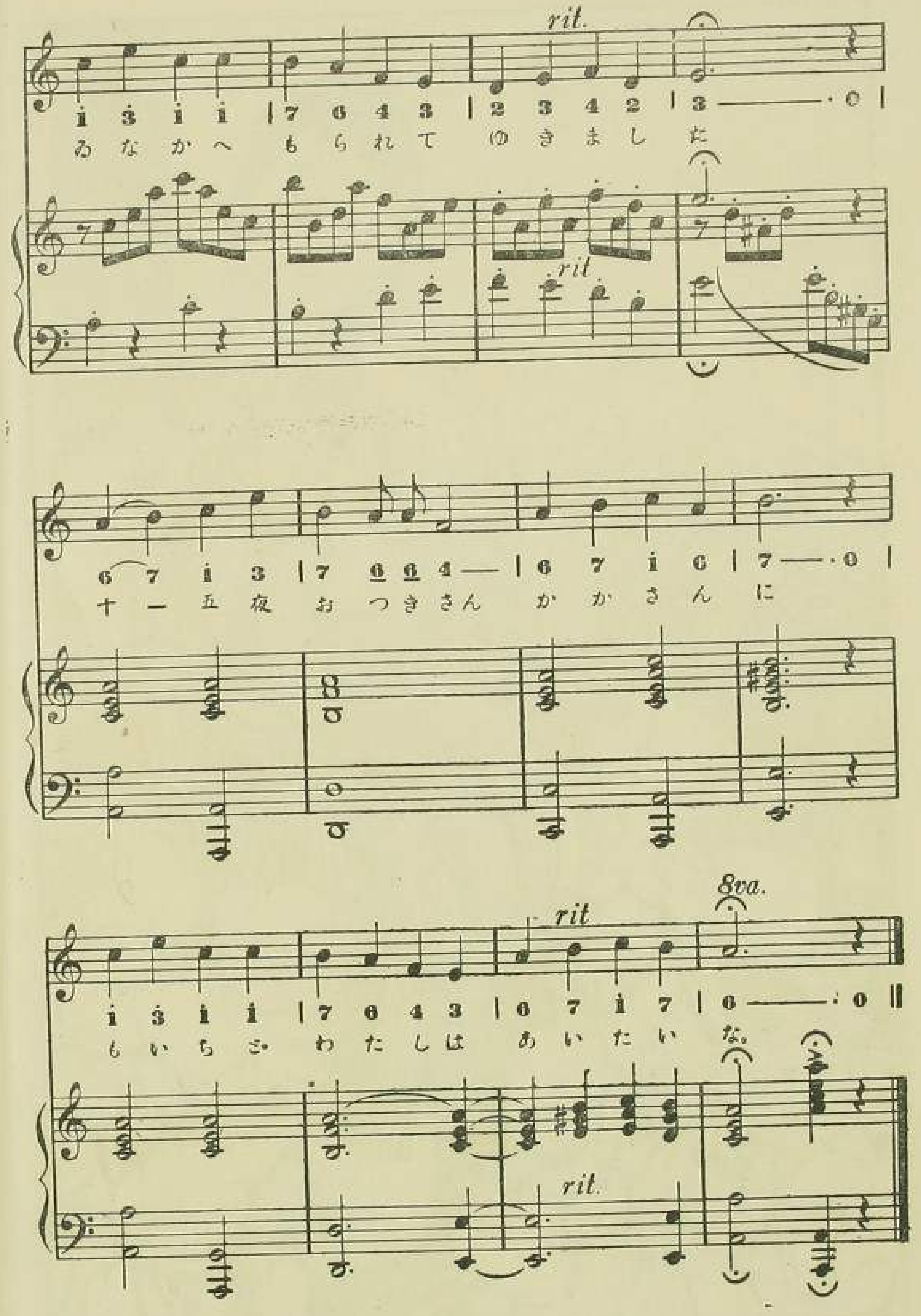
十五夜お月さん

野口雨情著
本居長世曲
岡本歸一畫

十五夜お月

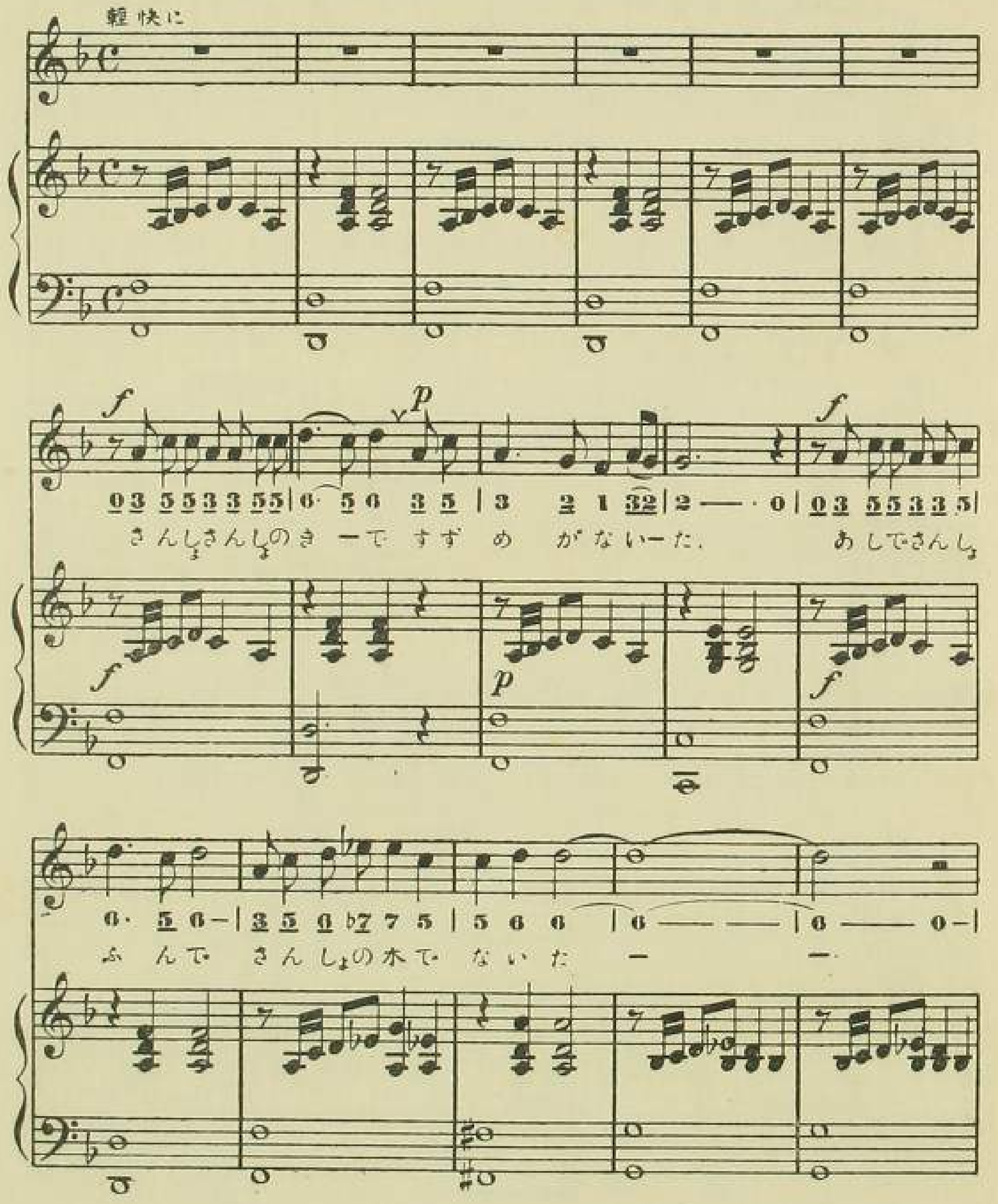


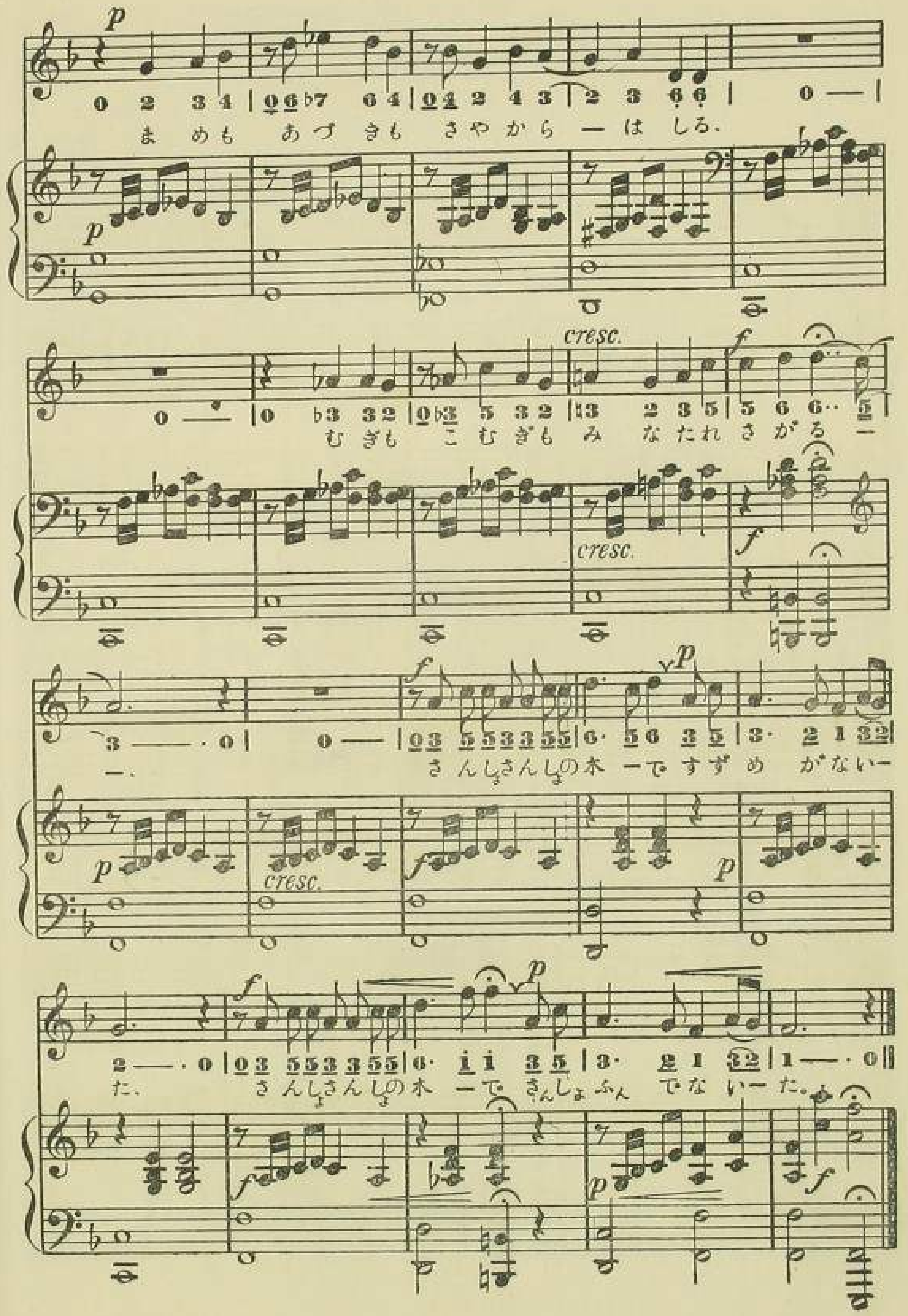
十一五夜おつきさんごきげんさん
ばーやはおいとまとりました
十一五夜おつきさんいもうとは



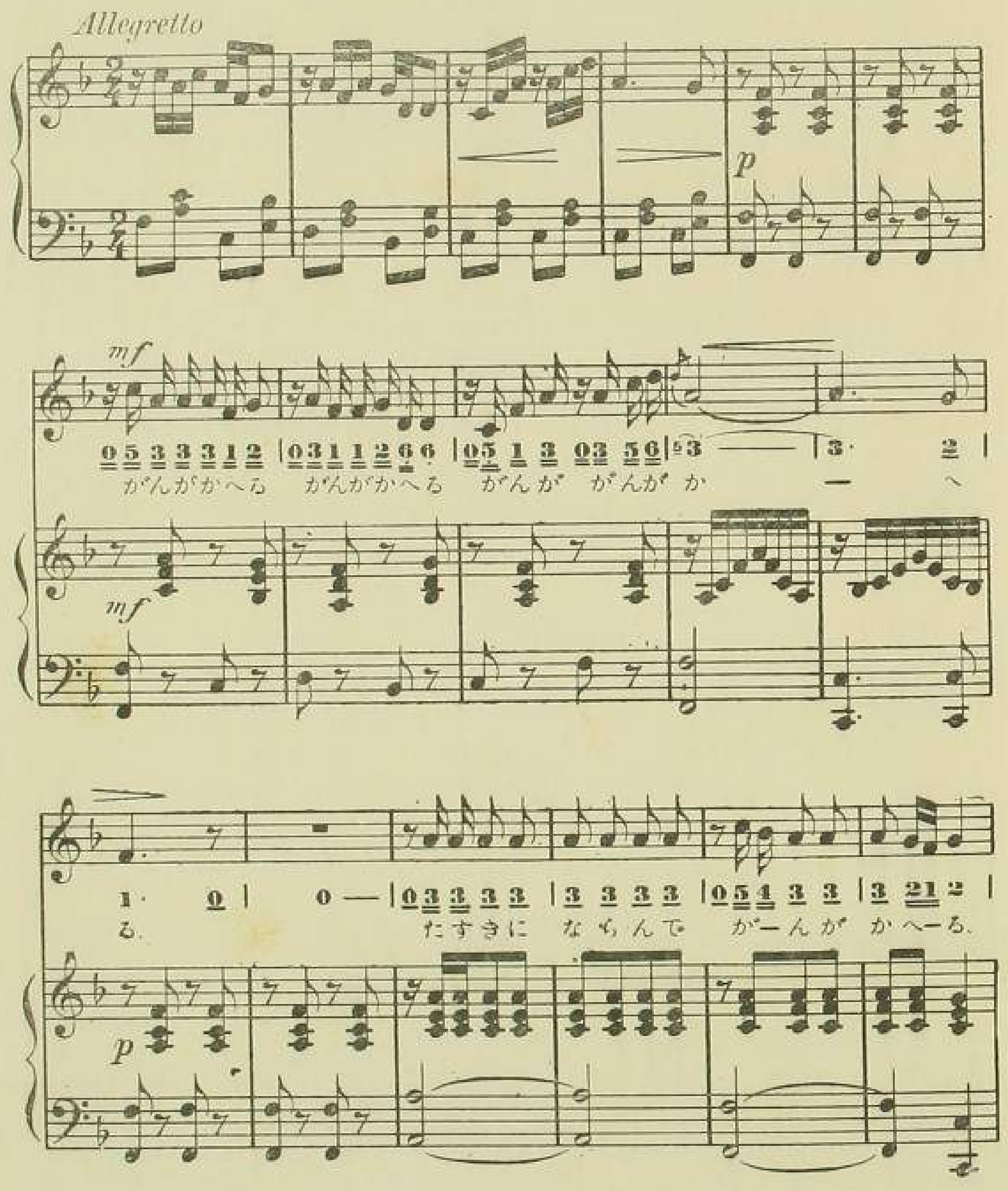
ゐなかへもられてゆきました
十一五夜おつきさんかかさんに
もいちどわたしはあいたいな

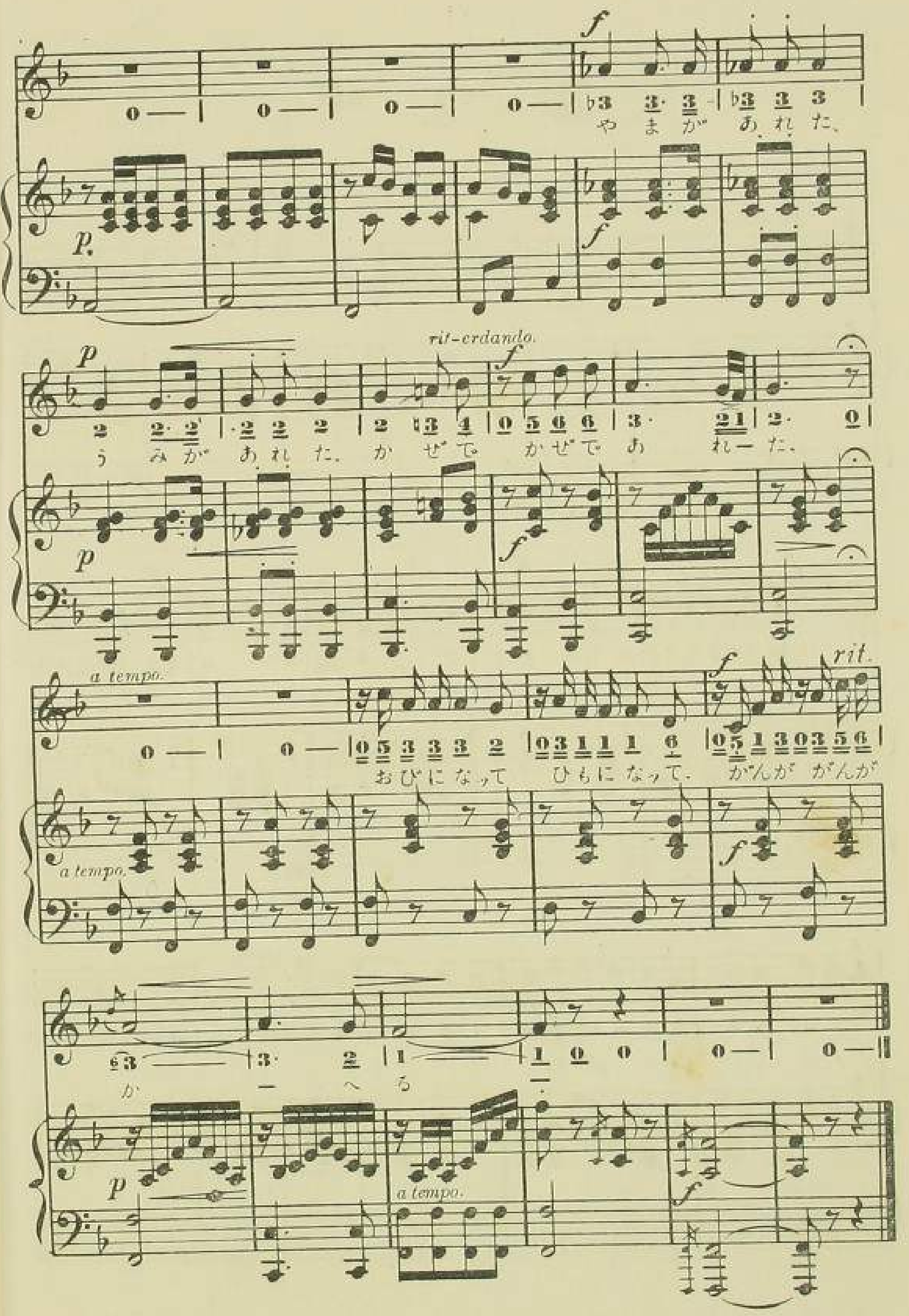
豊作唄


軽快に
さんしょさんしょのきーですずめがないーた。
あしでさんしょ
ふんでさんしょの木でないたーー。


まめもあづきもさやからーはしろ。
むぎもこむぎもみなたれさがるーー。
さんしょさんしょの木ーですずめがないーた。
さんしょさんしょの木ーでさんしょふんでないーた。

歸雁


Allegretto
がんがかへる　がんがかへる　がんが　がんがか
ー　へ
る。
たすきに　ならんで　がーんが　かへーる。


やまが　あれた、
うみが　あれた。かぜで　かぜで　あ　れーた。
rit-ardando.
a tempo.
おびになって　ひもになって、がんが　がんが
rit.
か　ー　へ　る
a tempo.

目次

蜀黍畑……一
螢の提灯……三
豊作唄……五
日傘……八
九官鳥……一〇
信田の籔……一二
虹の橋……一五
人形屋……一七
雨夜の傘……一九

燕……一一
トマト畑……一三
烏と地藏さん……一六
冬の日……一九
雲雀の子とろ……二一
赤牛黒牛……二四
十六角豆……二六
葱坊主……二八
鷺鳥……四〇
山椒の木……四二
山の狐……四四

烏の小母さん……四七
赤いマント……四九
母さん里……五一
可愛い小鳥……五三
森の中……五五
闇夜……五七
堂鳩……五九
汐がれ濱……六一
雉子……六三
鵙と雀……六五
鈴虫の鈴……六七

みそさざい……六九
象の鼻……七一
四丁目の犬……七三
柿……七五
糸切……七八
人橋……八〇
蜂……八二
酸漿提灯……八五
お山の烏……八七
青い青い海……八九
迷子……九一

鶏さん……九三
十五夜お月さん……九五
鼬の嫁入り……九七
烏猫……九九
百弗……一〇三
カンカラカン……一〇五
兎の耳……一〇七
時雨唄……一〇九
雀の家……一一二
親鶏子鶏……一一四
留守番……一一六

蜂……一一九
歸る雁……一二〇
機織蟲……一二二
田甫の狐……一二四
青い空……一二七
地藏さん……一三〇
孟宗の竹籔……一三三
手毬唄……一三八
河童の祭……一四一
山の日……一四三
猫の髯……一四五

子……一四七
七つの子……一四九
河原千鳥……一五一
ホーホー鳥……一五三
雪降り小女郎……一五五
木小屋と柿の木……一五七
だまされ太郎作……一六〇

十五夜お月さん

蜀黍畑

お背戸の 親なし
はね釣瓶
海山 千里に
風が吹く
蜀黍畑も

日が暮れた
鶏さがしに
往かないか。

螢の提灯

螢の提灯光つてる。
ぴかん ぴかん光つてる
早くみんなで追つかけよう
螢の提灯 考へた
ぴかん ぴかん考へた

早く提灯とつちまい
螢の提灯消えちやつた
つーん つーん消えちやつた
早く蠟燭見せてやれ。

豊作唄

山椒 山椒の木で
雀が啼いた
足で 山椒踏んで
山椒の木で啼いた
豆も 小豆も

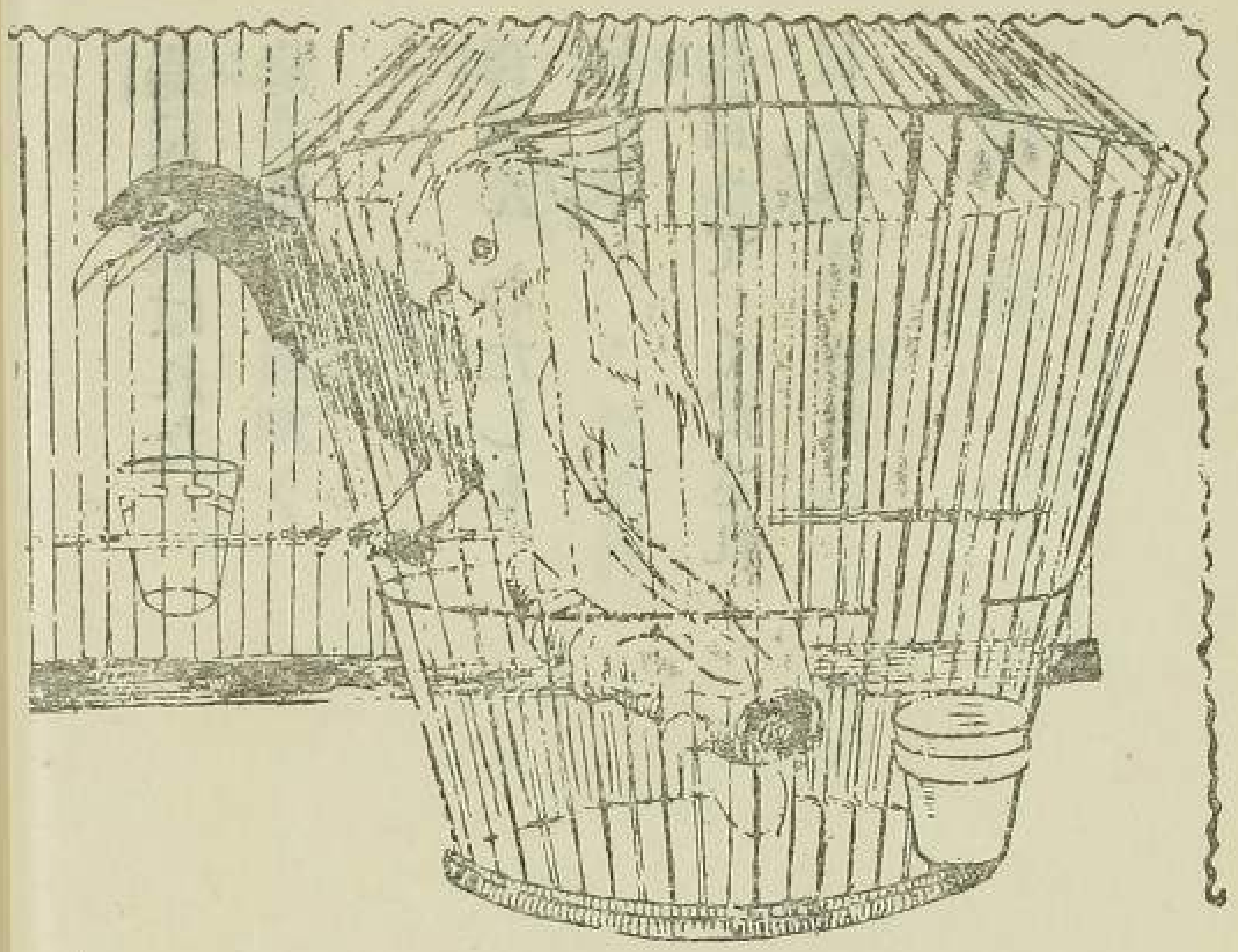
莢から はしる
麥も 小麥も
みな たれさがる
山椒 山椒の木で
雀が啼いた
山椒 山椒踏んで

山椒の木で啼いた

日傘

わかれた 母さん
日傘
物言うて くだされ
日傘
お背戸に 風吹く
篠藪は

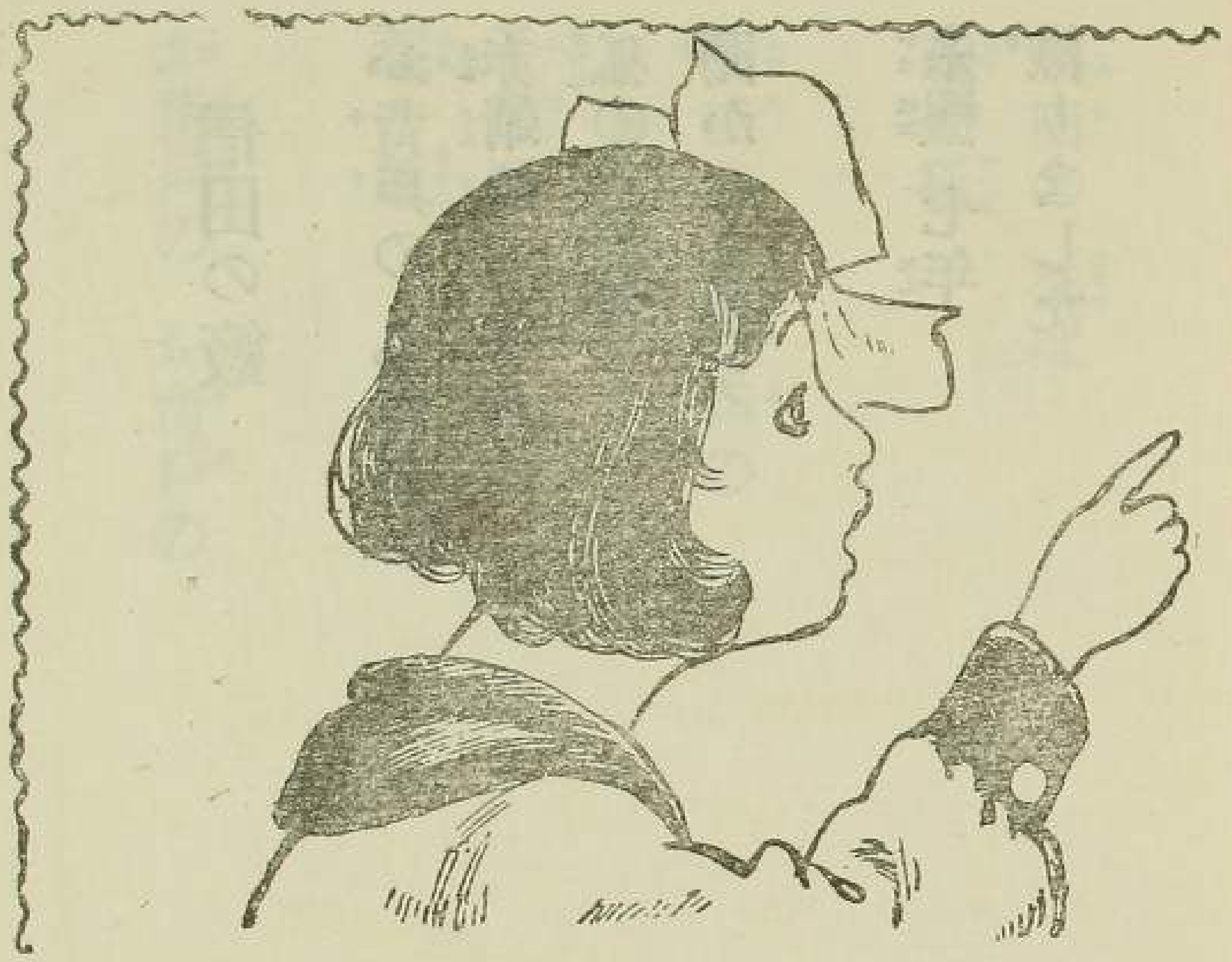
鳥に 喰はれた
烏瓜
母さん わたしも
日傘
物言うて くだされ
日傘。



九官鳥

九官鳥に
君が代唄はせよう
「千代に八千代」に
唄はせよう

鸚鵡に
君が代唄はせよう



「巖となりて」と
唄はせよう

わたしも
君が代唄ひませう
「レ・ド・レ・ミ・
ソ・ミ・レ」と
唄ひませう。

信田の藪

お背戸の　お背戸の
赤蜻蛉
狐の　お噺
聞かせませう
糸機　七年
織りました

信田の　狐は
親　狐

信田の　お背戸の
ふるさとで
子供に　こがれた
親　狐
お背戸の　お背戸の

赤蜻蛉
明日も　お籔に
來てとまれ。

虹の橋

あつちの町と
こつちの町と
太鼓橋かけた

赤い草履はいて
みんなで渡らう

あの子も　渡れ
この子も　渡れ
仲よく渡れ

虹の橋　高いぞ
手手ひいて渡れ。

人形屋

人形屋の
小母さん
髪結つてた
元結で
むすんで
髪結つてた

人形にも
いい髪
結つておやり
元結で
むすんで
結つておやり。

雨夜の傘

雨夜の
傘
蛇の目傘
文福茶釜は
化け茶釜

お寺の釣瓶も
化け釣瓶
雨夜に
傘
さして來た。

燕

燕の母さん
酒落母さん
そろひの簪
買つてやろ

牛乳屋の表に遊んでた

母さん燕は洒落母さん。

トマト畑

雨降り雲は
なぜ來ない
トマト畑が
みな枯れる

トマト畑に
太陽は

じりり〴〵と
照らしてる
雨降り雲は
なぜ來ない
トマト畑が
みな枯れる
トマト畑の

百姓は
赤いトマトを
眺めてる。

烏と地藏さん

石の地藏さん
居ねむりしてた
にこり〳〵と
居ねむりしてた
烏アとき〴〵

團子見て啼いた
石の團子で
盜つても駄目だ
石の地藏さん
駄目團子もつてた
にこり〳〵と

駄目團子もつてた。

冬の日

（茨城でうまれた文ちやんの唄）

ここの屋敷は
空屋敷
文ちやんうまれた　茨城の
元の屋敷も
空屋敷
ここの畑は

桐の畑
文ちゃんうまれた　茨城の
背戸の畑も
桐畑

ここの姉さん
日和下駄
文ちゃんうまれた　茨城の
お夏娘も

日和下駄
ここの柱は
木の柱
文ちゃんうまれた　茨城の
元の御門も
木の柱

雲雀の子と

こをとろことろ
田甫の中の
雲雀の子とろ

畑の中に
菜種の花は
ならんで咲いた

厩の背戸の
豌豆の花も
ならんで咲いた

こをとろことろ
親父は留守だ
雲雀の子とろ。

赤牛黑牛

赤牛 黑牛
モー モー
あつち向いちや
モー モー
こつち向いちや

モー モー
父さん 母さん
モー モー
角が生えてる
モー モー。

十六角豆

胡麻の木畑は
皆はねた
十六角豆も
皆はねた
雀が 畑に

かくれてる
鐵漿とんぼに
話して來。

葱坊主

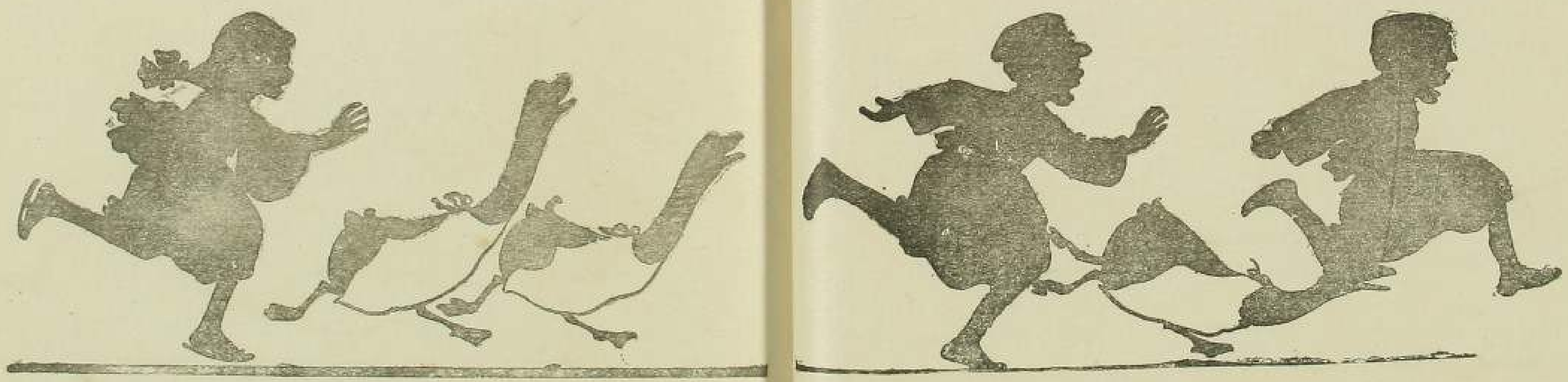
ぴュ ぴュ 風が
山から
吹いた
昨日も 今日も
畑に
吹いた

畑の中の
葱坊主
寒いな。

鵞鳥

鵞鳥に腹掛け
かけさせて
みんなで遊びに
つれてゆこ
玩具屋の表は
駈けて通ろ

みんなで　ならんで
駈けて通ろ
鵞鳥も一緒に
駈けるだろ
長い頸ふりふり
駈けるだらう。



山椒の木

田甫の　田甫の
山椒の木
上總は　鰮の
大漁だ
おいらが　父さん

いつ歸る
聞かせて　くれぬか
山椒の木。

山の狐

片親 ない子は
門で泣く
双親ない子は
背戸で泣く
雀は 門で啼く
背戸で啼く

狐は 野で啼く
山で啼く
門で泣け 門で泣け
明日の晩は
山で啼く狐が
背戸へ來るぞ
背戸で泣け 背戸で泣け

明日の朝は
山で啼く狐が
門へ來るぞ。

烏の小母さん

烏の小母さん　機織つてた
チンバタ　チンバタ
機織つてた
木綿の腹掛　機織つてた
泣く兒に
腹掛買つてやれ

烏の小母さん　機織つてた
チンバタ　チンバタ
機織つてた

更紗の綿入　機織つてた
泣く兒に
綿入買つてやれ。

赤いマント

家鴨は水飲んで
つめたからう
ぐんぶ〳〵水飲んで
つめたからう

家鴨に赤いマント

買つて着せよう
赤いマント　可愛から
買つて着せよう
マント屋の　赤いマント
買つて着せよう。

母さん里

母さん　里は
一本榎
親鳩　子鳩
ならんで見てた
のつぽ〱榎

天までとどけ
母さん里へ
餅負つて行つた。

可愛い小鳥

小鳥屋の店は
チツチク チツチク店だ
小鳥屋のお父さん
目くちやれお父さん
小鳥のお母さん

朝寢ンぼお母さん

雌雄二羽の
可愛い鳥だ

小鳥屋の店で
チッチク　チッチク啼いてた。

森の中

森の中の一本櫻に
花が咲きました

朝晩小鳥が來て
啼いてをりました

一羽の小鳥は

赤い足でした
一羽の小鳥は
青い羽根でした
どつちの小鳥も
いい聲でした。

闇夜

親貉　子貉
今夜は
闇夜だ

ぐつり　わつり
和尚は
しぶ〳〵提灯出かけたぞ

親雛　子雛
お月さんに
化けろ。

堂鳩

親鳩　子鳩
ほんとの堂鳩

畑の中で
啼いてた　堂鳩

お寺の背戸に

鐵砲打ち通る
親鳩 子鳩
屋根から見てた。

汐がれ濱

ペン〳〵草は
どこまでのびる

港の雨は
パラ〳〵雨だ

汐がれ濱の

小笹にたまれ
小笹もゆれろ
港もゆれろ。

雉子

雉子が啼いた　雉子が啼いた
山で啼いた
茨に刺されて
雉子が啼いた
雉子が言うた　雉子が言うた

山で言うた
足袋縫ふて　はきませうと
雉子が言うた。

鼬と雀

この家は
引つ越して
雨戸が　締つてをりました
お庭の　お庭の
眞中に
鼬が　歩いてをりました

ここの家は
引つ越して
雨戸が　締つてをりました
お庭の　お庭の
木の上に
雀が遊んでをりました。

鈴虫の鈴

鈴蟲　鈴蟲
チンチロリン
鈴　どこから持つて來た
母さんお嫁に
來るときに
番頭に負はせて持つて來た

鈴蟲　鈴蟲
チンチロリン
鈴　ちよつくら貸してみろ
貸したら返さぬ
あーかんべ
番頭に負はせてやつちやつた。

みそさざい
ちツ　ちツ
啼いてる
鷦鷯
畑に
赤牛
立つてたぞ

雨こんこ
パラ〳〵
降つて來た
傘
さゝせる
こつちへ來。

象の鼻

象に猿衣 着せたら
うれしがろナ
赤い帽子 かぶせたら
うれしがろナ
象に靴はかせたら
あるきだそナ

象の足 太いから
重たかろナ
象の眼は 小さいから
ねむたかろナ
象の鼻 長いから
日が暮れるナ。

四丁目の犬

一丁目の子供
駈け駈け 歸れ
二丁目の子供
泣き泣き 逃げた
四丁目の犬は

足長犬だ
三丁目の角に
こつち向いてゐたぞ

柿

五兵衛さん娘が
柿 持つてた
おいらに見せ見せ
柿 持つてた

隣の ぼんちも
柿 持つてた

おいらに見せ見せ
柿 持つてた

柿 買つて食べたい
錢 おくれ
向ふの小母さん
錢 おくれ

おいらが母さん なぜ死んだ

おいらにだまつて なぜ死んだ
草端の蔭から
柿 おくれ。

糸切

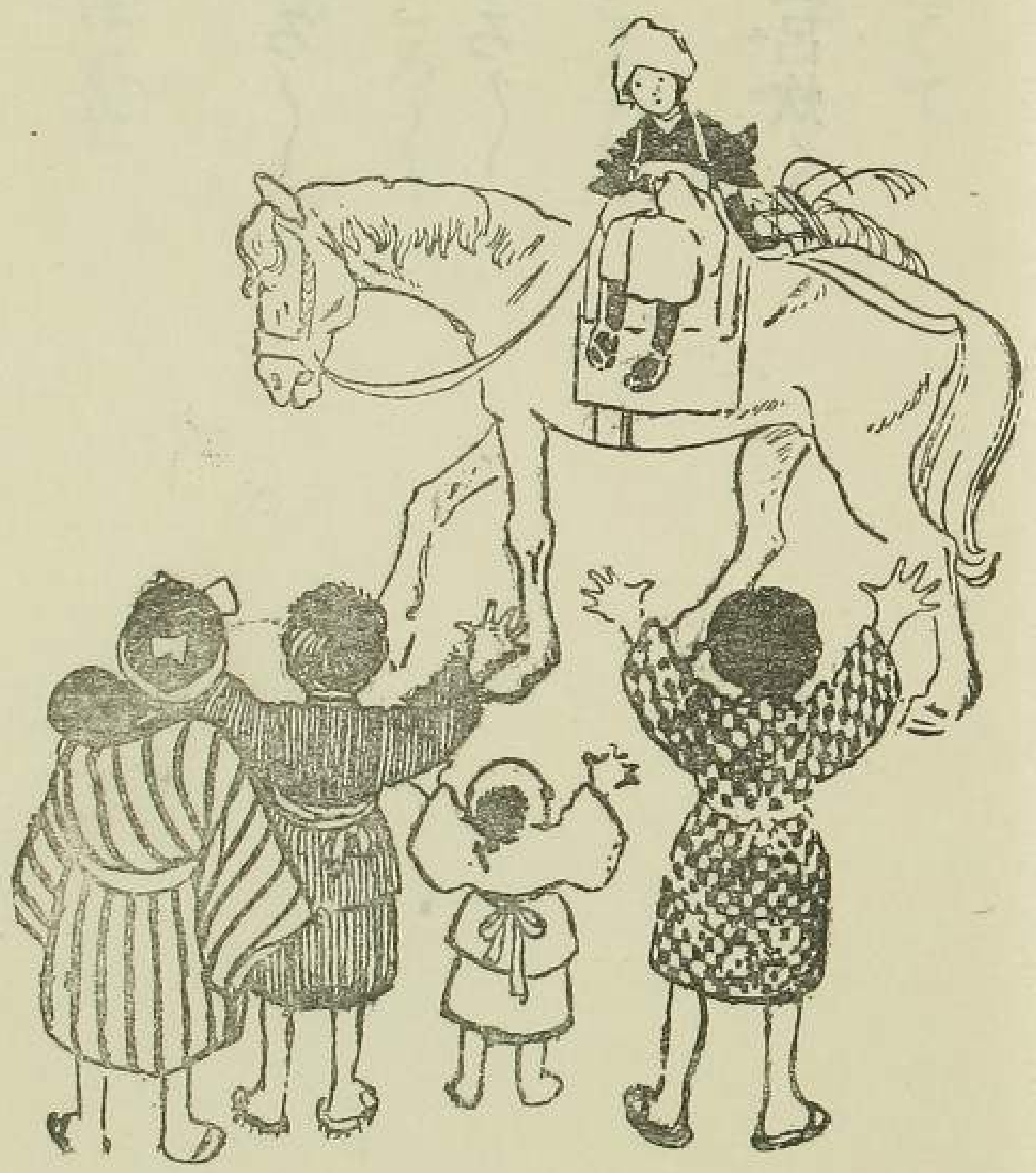
糸切蟲に
どの糸切らせう
ほぐれた糸を
よりより切らせう
糸切蟲は

赤い糸切つた
小さな口で
ぽきんと切つた。

人橋

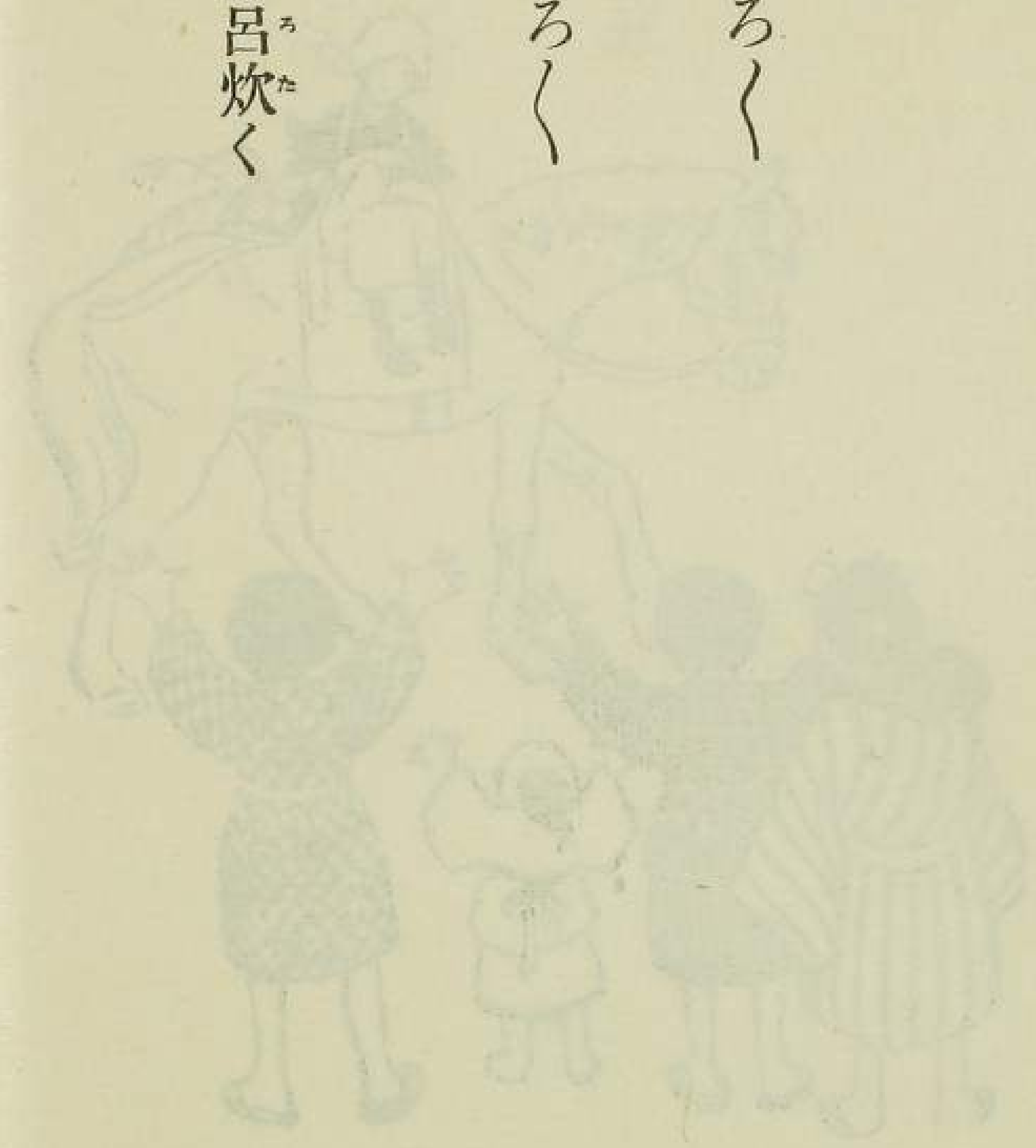
隣の家は
昨日も　るすだ
厩の　背戸に
蚯蚓が鳴いつた
人橋かけろ

どんど橋
かけろ
姉上さまは
馬に乗つて
行つた。



蟀

ころ〳〵 ころ〳〵
蟀が
ころ〳〵 ころ〳〵
鳴いてゐる
風呂場で 風呂炊く
風呂の火が



煙くて 煙くて
鳴いてゐる

ころ〳〵ころ〳〵
蟀が
ころ〳〵ころ〳〵
鳴いてゐる

甕からこぼれた

甘酒を
飲ませておくれと
鳴いてゐる。

酸漿提灯

おら家の　提灯
酸漿提灯
畑さ　提灯　ぶらさげた
となりの　提灯
酸漿提灯
畑さ　提灯　ぶらさげた

畑の　提灯
酸漿提灯
夜晝　提灯　ぶらさげた

お山の烏

カッコ〱歸れ
お山の烏
明日は　雨だ
カッコ〱歸れ
鳩ポッポ啼いた

ポッポ〱啼いた
お山の烏
カッコ〱歸れ。

青い青い海

山から
タッチクだ
海から
タッチクだ
タッチク　タッチク　タッチクだ
父さん戀し

母さん戀し

海鴨も
タツチクタツチクタツチク　タツチクだ
青い青い海を
見てたが
いいか。

迷子

赤い帯しめた
赤い下駄はいた

どなたと行つた
一人で行つた
どこまで行つた

どなたも知らぬ
八幡様の
狐に聞いた。

鶏さん

雛の母さん
鶏さん
鳥屋に買はれて
ゆきました
大寒　小寒で
寒いのに

雛と　わかれて
ゆきました
雛に　わかれた
母鶏さん
鳥屋で　さびしく
暮すでせう。

十五夜お月さん

十五夜お月さん
御機嫌さん
婆やは　お暇とりました
十五夜お月さん
妹は
田舎へ　貰られて　ゆきました

十五夜お月さん　母さんに
も一度
わたしは　逢ひたいな。

鼬の嫁入り

今夜は鼬の嫁入りだ
鼬に
長持貸してやれ

厩の　うしろの
篠籔に
鼬が提灯つけてゐた

厩の うしろの 篠籔は
霜枯れ篠籔
おお 寒い
今夜は鼬の嫁入りだ
鼬に
駒下駄貸してやれ。

烏猫

烏猫 烏猫
眼ばかり光る
烏猫
のろりのろり 歩いてる
ほんとに狡い
烏猫

矮鶏の雛 追っかけた
尻尾の長い
烏 猫

厩の背戸に
晝寝しろ
ぐう〳〵ぐう晝寝しろ

火箸が ぐんにやり曲るほど
たたいてやるから
晝寝しろ。

百弗

猫の小母さん
木兎さん
百弗貸すから
家建てろ

石でたたんだ
家建てろ

煉瓦で　たたんだ
家建てろ

猫の小　さん
木兎さん
小猫にも百弗
金貸した

百疊、疊が出來て來る

どん〳〵踏んでも踏みきれぬ
朝晩踏んでも
踏みきれぬ。

カンカラカン

港の船は
カンカラ　カンカラ　カンカラだ
ざんぶ　ざんぶ　波に
ゆられてゐたぞ

河原の石も
カンカラ　カンカラ　カンカラ　カンカラだ

どんか どんか 風に
吹かれてゐたぞ
厩の馬も
カンカラ カンカラカンカンカラだ
長い 長い 顔で
水飲んでゐたぞ。

兎の耳

兎の足は 跛だナ
耳 切つてつなご
跛だ 跛だ 跛だナ

縛つて切ろか
だまして切ろか
跛だ 跛だ 跛だナ

兎に話すと逃げだすぞ
耳　負つて
逃げだすぞ

誰にも默つて番してろ
耳　見ながら
番してろ。

時雨唄

雨降りお月さん
暈くだされ
傘　さしたい
死んだ母さん　後母さん

時雨の降るのに
下駄くだされ

跣足で 米磨ぐ
死んだ母さん 後母さん
親孝行するから
足袋くだされ
足が凍てあるけない
死んだ母さん 後母さん
奉公にゆきたい

味噌くだされ
に飯がとほらない
死んだ母さん 後母さん。

雀の家

雀のお家は
どこでせう
雀に聞いても
かくしてる
子雀 だまして

聞きませう
學校のうしろの篠藪は
わたしのお家と
云ひました。

親鶏子鶏

親鶏　子鶏
トツト〱驅けろ
下駄屋の店で
下駄買つてはかせう
親鶏　子鶏

トツト〱驅けろ
ニヤア〱猫も
下駄　買つて來たぞ。

留守番

隣の母さん
繼母さん
鼬に　留守番
たのんでた
小豆の飯は
赤飯

鼬は　あかんべ
仕てたッけ

隣の父さん
よい父さん
鼬に　留守番
たのんでた
小豆の飯は

赤飯
鼬が　留守番
仕てたッけ。

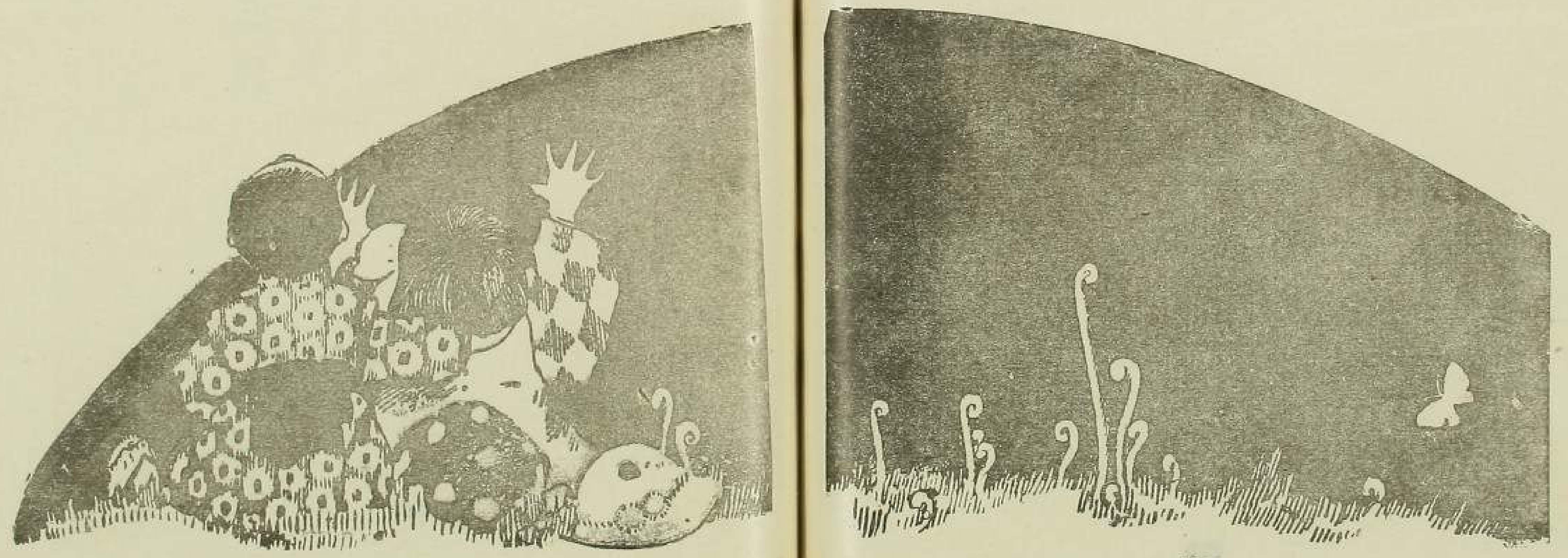
蜂

蜂　蜂　飛んで來ナ
ちつくり針　置いて來ナ
いつさッさアと遊ぼ
蜂　蜂　飛んで來ナ
ちつくり針　置いて來ナ。

歸る雁

雁が　歸る
雁が　歸る
雁が　歸る
襷にならんで
雁が
歸る

山が　暴れた
海が　暴れた
風で　暴れた
帶になつて
紐になつて
雁が歸る。



機織蟲

機織蟲は
一機 織つた
カンカラ コン
カンカラ コン
田舍は 涼し

凌霄花
カンカラ コン
カンカラ コン
機織蟲と
一緒に 遊ぼ。

田甫の狐

昔、或所の田甫に古狐がゐました。若い女に化けて旅人をだまさうとした噺があります。

田甫の狐は
赤い櫛さして
赤い帯しめて
後姿　見せて

三味線ひいてた

又、子供をだまさうとした噺もあります。

田甫の狐は
芒の蔭で
赤い　風船
飛ばした
青い　風船

飛ばした

畑の中で小酒盛をしてゐました噺もあります。

田甫の狐は
畑の中に
胡座をかいて
河童の小父と
小酒盛してた。

青い空

母さん 來るまで
姉さんと
青い空 青いから
見てゐませう

二歳で あんよが
出來たから

母さんゐなくも
ゐられるわネ
青い空見てゐで
青い空に
夜になると　お星さま
出て來るのよう
母さん　歸りが

遲いときは
門へ出て　姉さんと
待つてゐませう。

地藏さん

空ア火事だ　梯子出せ
頭さ木杭降つてくらァ
嘘なら　狸に
聞いて見ろ

狸に聞いたら　舌出した
傘かづいで　舌出した

嘘なら　蚯蚓に
聞いて見ろ

こんやは　蚯蚓の行列だ
狸も跣足で　行列だ
嘘なら　地藏さんに
聞いて見ろ

地藏さん　太皷を買つて來た

ドドンコ　ドン〳〵叩いてる
狸も一緒に　叩いてる
嘘なら　默つて口出すな。

孟宗の竹籔

お寺の竹籔
孟宗の竹籔
お小僧が　掘つても
孟宗の竹籔
お弟子が　掘つても

孟宗の竹籔
掘つても 掘つても
孟宗の竹籔
お弟子が あきれて
鍬 投げた
お小僧も あきれて

鍬 投げた。
じんぐ じんぐ 掘つても
孟宗の竹籔
どこまで掘つても
孟宗の竹籔
よくよく これはと

鍬　投げた。

そろ〵　踏んでも
孟宗の竹藪
ヤンヤと　踏んでも
孟宗の竹藪
踏んでも　打ても

孟宗の竹藪
和尚さん　駄目だと
鍬　投げた。

手毬唄

お手毬ついて
毬ついて
二人で仲よく
遊びませう
あなたも　草履を
はいといで

わたしも　草履を
はいて來よう
あなたの　髪は
お煙草盆
わたしの　髪も
お煙草盆
お手毬ついて

毬ついて
二人で仲よく
遊びませう
明日も　明日も
遊びませう
仲よく　仲よく
遊びませう。

河童の祭

今夜は　河童の
お祭だ
獺ァ　車に
乗つて來らァ
泣く子は　河童に

獲られるぞ

お祭ァ 太鼓で
押して來た

泣く子に 當薬
なめらせろ。

山の日

寒い日が
續いた

ぽかり ぽかり
日が照れ
日南ぼつこ

暖いな
山から海から
日が照れ。

猫の髯

隣の父さん
小豆 一升
煮てた

牡丹餅 甘いな
てつこ盛つて
食べた

三毛猫ァ馬鹿だぞ
髯に
火がはねた

子

田甫の　田螺
早く
早く
起きろ

子供の雁は
ぱつた

ぱつた
翼だ
遠い遠い國へ
飛び
飛び
往つた

七つの子

烏 なぜ啼くの
烏は山に
可愛七つの
子があるからよ

可愛 可愛と
烏は啼くの

可愛 可愛と
啼くんだよ

山の古巣に
行つて見て御覧
丸い眼をした
いい子だよ。

河原千鳥

こん〳〵 狐に
まはされた
娘は 昨夕も
歸らない
今夜も 河原で

啼け 千鳥
晩方のお日さま
ゆつさ〳〵
小笹に ゆられて
ゆつさ〳〵。

ホーホー鳥

鶉の鳥が
田甫で 啼いた
田甫の土を
踏み踏み 啼いた
ホーホー鳥も

お山で 啼いた
お山の森に
隠れて 啼いた
もう日が暮れる
お家へ歸ろ。

雪降り小女郎

泣く子は
歸れ
雀と歸れ
一軒家の
背戸に
雪五合降つて來た

山の　山の
奥の
雪降り小女郎
一里も　二里も
雪負つて
飛んで來た。

木小屋と柿の木

太郎作家の鼬の子『このごろ魂消た　出來事だ
太郎作どんには
內證だぞ
次郎作どん家の
姉さまは
太郎作どん家の　柿の木さ

朝晩　かかつて
ゐたんだぞ
次郎作家の鼬の子『己らも魂消た　出來事だ
次郎作どんには
内證だぞ
太郎作どん家の
鶏雛と

次郎作どん家の　鶏雛と
木小屋さ　あがつて
ゐたんだぞ。

だまされ太郎作

鼻黒鼬
『太郎作どんてば　太郎作どん
留守番すべから　往つてごぜえ
だまされ太郎作
『たしかに　留守番
たのんだぞ

太郎作家の　鶏の子
『鼬奴　來たらば
なじよにしべえ
鶏の親父
『厩の前ちよで
遊んでろ

鼻黒鼬

『うまいぞ　雛鷄　追つかけべえ
太郎作ァ來たても話すなョ

鼻黒鼬の子供

『親父さん』己らも
追つかけらァ

柿の木の上の雀

『己らは　なんにも
知んねえぞ

厩の馬

『己らも　なんにも
知んねえぞ

背戸籔のみそさざい

『雛鷄ア追はれて逃げたつけ

尻餅つき〳〵逃げたつけ

井戸端の釣瓶

『太郎作どんてば戻らつせえ

この事　見たらば腰ァ抜けべ。

郷土の人と土とに親みの多い二三の方言が、本書童謠中にとりいれてあります。たとへば、「背戸」（第一頁其他）とは家の裏のことです。「てつこ盛つた」（一四五頁）とは山盛りに盛つたと云ふ意味です。又「雪降り小女郎」（一五五頁）とは、東京で云ふおほわたこわた（背に白き粉のある小虫の名）のことです。晩秋の曇つた日などに多く、群つて飛びます。私達の地方（茨城縣の北隅）ではこの虫が飛ぶと、軈て初雪の降るしらせだと云つてをります。

大正十年六月一日印刷
大正十年六月五日發行

十五夜お月さん
定價金一圓二十錢

不許複製

著作者　野口雨情

發行者　飯尾謙藏
東京市神田區南神保町十六番地

發行所　尚文堂
東京市神田區南神保町十六番地
振替口座東京一九三四四
電話九段一七五四

東京神田美土代町一ノ廿一　印刷者　白井赫太郎

名聲嘖々たる傑作書類

▼西條八十先生著 詩集 **砂金** 八版
氷の如き叡智と高貴の氣禀は相共に本書に於て著者の藝術は渾成の極致を示す。定價二圓卅錢 送十二錢

▲野口雨情先生著 童謠集 **十五夜お月さん** 新版
各地小學校並に各父兄諸士の慫慂に由り作曲挿畫を加へて模範的に發賣さる。定價一圓卅錢 送八錢

▼柳澤　健先生著 新詩評釋 **現代の詩及詩人** 第三版
本書一度出でゝ新らしき詩は初めて萬人の了解を得たる空前の好著也。定價二圓 送十二錢

▼西條八十先生著 譯詩集 **白孔雀** 第三版
英佛獨伊各代表詩人の傑作と著者が獨自の麗筆を以て邦語に譯したるもの也。定價二圓 送十二錢

▼前田春聲先生著 詩集 **韻律と獨語** 第二版
最も人格的にして眞實なる藝術たる詩を愛する人々には必讀の價値を存す。定價一圓四十錢 送八錢

抒情詩名作著書

一編 ▼西條八十先生著 抒情小曲 **靜かなる眉** 第十五版
若人の爲にとて唄はれたる著者が年若き日の思出なり誰か涙なしに讀み得む。定價九十錢 送六錢

二編 ▼水谷　勝先生著 抒情小詩 **寶石の夢** 第五版
乙女の夢の彌が上にも淸く美しかれと希ひつゝ花散る蔭に物思ふ好詩集なり。定價九十錢 送六錢

三編 ▼野口雨情先生著 民謠集 **別後** 第四版
深く現實の人生に徹して得たる哀艷限なき鄕土文藝と忽ち最大好評を博せり。定價九十錢 送六錢

四編 ▼竹久夢二先生著 抒情小詩 **青い小徑** 新版
著者の名筆は詩に畫に定評あり本書は情緒纏綿たる詩に挿畫廿餘を加ふ。定價一圓廿錢 送八錢

▼西條八十先生著 童話集 **不思議の窓** 近刊
愛子愛弟の爲めに本書の生れたるは幸福なり乞ふ諸姉兄の御撰擇を（六月二十五日發賣）

▼西條八十先生著 新らしき **童謠の作り方** 近刊
後より來たる者の爲めに共進路に誤ち無からしめむと本書を上梓さる（六月十五日頃發賣）

尙文堂發行
電話九段一七五四
振替口座一九三四四